

Zoltán Lantos'

Tiptoe



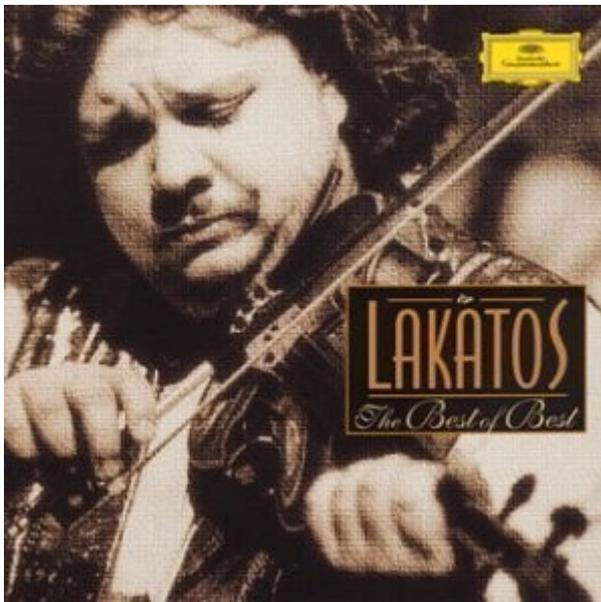
[オラシオ](#)

2015/02/25 18:20

Tiptoe Ceremony / Zoltán Lantos' Mirrorworld

ハンガリーでヴァイオリンとくれば、みなさんはどういうイメージを思い浮かべますか？ やはり「ロマ（ジプシー）」の民族色豊かなヴァイオリンでしょうか。現地のレストランとかで演奏してそうなやつ。

はたまた、一頃かなり一世を風靡したロビー・ラカトシュ（現地語的に書くとラカトシュ・ロビ Lakatos Roby）を思い浮かべる方も多いでしょう。あの強烈な風貌と猛烈なテクニックによるサウンドの印象は、ポップな売り出し方（「だんご三兄弟」のカヴァー なんかもやってましたね）も含めてかなり強かったと思います。



ロビ自身は何でもできる演奏家で、かつ一般の人の心もつかみやすいポップなスピリットを持った人だったと思うのですが、結局日本で演奏するハコの種類の種類もあり、クラシック文脈の中で消化され、ハンガリーの今の音楽の一形態の導入部としてはほとんど効果がなかったのが残念なところですね。そんな状況の中では、たとえば「ハンガリーには他にどんなヴァイオリン奏者がいるんだろう」とかいう裾野を広げる疑問はあんまり生まれなかったんですね。

そこで今回ご紹介するのは、ハンガリーの現代シーンを牽引するジャズヴァイオリン奏者ラントシュ・ゾルターン Lantos Zoltánです。強烈なパーソナルイメージを持ち、その中で他ジャンル交流を繰り広げるラカトシュ・ロビとは違い、ジャズミュージシャンらしくグローバルな規模の舞台にどんどん飛び出して行って積極的に共演するフレキシビリティが彼の持ち味です。ルーマニアのテナーサックス奏者ニコラス・シミオン Nicolas Simionのグループにもよく参加しています。また、彼の持ち味のもうひとつ特筆すべきなのは、10年近く武者修行したインドの民俗音楽の要

素をかなり濃厚に取り入れているところ。そんな彼のパーソナリティが炸裂したのがここでご紹介する、彼がリーダーのユニットMirrorworldの作品『Tiptoe Ceremony』

実はこの作品は拙監修本『中央ヨーロッパ現在進行形ミュージックシーン・ディスクガイド』でもぜひ紹介したかったのですが、入手が間に合わず泣く泣く見送りました。タブラもゲストに加え、ハンガリーと言うよりはプロGRESSIVE・ESNO・JAZZとでも表現したいシャープな演奏にピシピシと切れ味鋭いラントシュのヴァイオリン、ESNO風味たっぷりなメロディというサウンドにどことなく漂うスケールの大きな浮遊感もたまらない一枚です。

また、このグループで特筆すべきなのは、一時日本の共産圏国ジャズファンにとってはヒーローだった、ハンガリーの戦慄の木管奏者ドレシュ・ミハーイ Dresch Mihályがレギュラーメンバーなことでしょう。「螺旋状に燃え上がる」と表現されることしばし、の彼のスピリチュアルでテクニカルなアプローチは本作でも健在。と同時に、そのイメージにとどまらない彼の多彩な側面ものぞける、往年のヨーロッパ・ジャズファンにも聴きどころのある作品でもあります。ハンガリーの公的レベルであるBudapest Music Center（通称BMC）からのリリース。

本人のウェブサイトやBMCのサイトでメンバーなどなど詳しいデータをどうぞ。また、違うアルバムからですが、同じMirrorworldのサンプルも↓で聴けます。

<http://zoltanlantos.com/>

<http://bmcrecords.hu/pages/frameset/index.php>